

# EDUCATION

## 医学生理学クイズ日本大会 2023 (PQJ 2023) 開催報告

PQJ 2023 代表/札幌医科大学医学部 6 年

工藤 大樹

### 【はじめに】

私は 2023 年 3 月 26 日という日付を、長い間忘れないと思います。それはこの日が Physiology Quiz in Japan 2023 の開催日だからです。

PQJ (Physiology Quiz in Japan) は生理学を中心とした基礎医学の国際クイズ大会であり、2016 年の第 1 回大会以降、毎年日本の大学が主催校として運営を担っています。参加資格は大学生であることのみであり、学部、学年、国籍は問わないとしています。参加者は年々増加しており、特にコロナ禍でオンライン開催となった第 5 回大会からは、海外からの参加者の急増に目を見張るものがあります。

第 7 回大会である PQJ 2023 は、札幌医科大学主催のもと 12 の国と地域(中国、インドネシア、日本、ベトナム、バレー、マレーシア、エジプト、モンゴル、チェコ、スロベニア、ベルギー、マカオ)から約 125 チーム、500 人もの参加者を集め、大変賑やかな大会となりました。

この度、幸いにも PQJ 2023 での経験について筆を執る機会をいただきましたので、運営にあたって感じたことも交えながらお伝えできればと思います。

### 【大きな挑戦】

私が PQJ を知ったのは 3 年生のときでした。札幌医科大学の生理学講座の先生方に紹介していただき、第 5 回大会である PQJ 2020 に 4 人の仲間たちとともに参加したのですが、予選最下位という惨憺たる結果に終わりました。そして、リベンジのために参加した翌年の PQJ 2022 で入賞した



ことをきっかけに、PQJ 2022 代表の卜部真輝さんから次大会主管のお誘いをいただきました。しかし、そのお誘いも最初はお断りしました。自分たちの能力と運営に費やせる時間を考えると、それは不可能なことにすら思えたからです。

しかし、その後も主管校がなかなか決まらず、2 度目の打診では心が揺れました。そして僕自身は PQJ の主催に傾くのですが、このような大規模な大会の運営をひとりではできるはずありません。まずは一緒に大会に出場したメンバーに声をかけましたが、反応はまちまちでした。一緒にやりたいと言ってくれるひともいましたが、みんな悩んでいる様子でした。理由をきくと、特に英語を話せないことがネックになっているようでした。本当に自分たちにできるのか、みんな不安で

した。

でも、それはもったいないと思いました。偏見かもしれませんが、そして私自身も常に反省するところですが、医学生は先に頭で考える傾向が強いように感じます。もちろん頭で考えることも大切です、それをおろそかにしてとりあえず手術してみるかというわけにもいきません。しかし、一歩医療の現場を離れれば、世の中はトライ＆エラーでまわっています。どんなに頭でシミュレーションしたところで、必ずどこかで壁にぶつかりますし、その壁はそのたびに乗り越えていくしかないのです。できない理由を探すよりも、どうやったらできるかを考えたいと思いました。

そのことを伝えると、みんなの気持ちも徐々に傾いていきました。そしてついに、私たちは PQJ 2023 の主催を決意します。

PQJ 2022 では、私たちよりも上の順位に Kami no money money という東北大学のチームもいました。ト部さんはこのチームにも PQJ の主管を打診されていましたが、プレイヤーとしてリベンジしたいということで断られていました。それをふまえ、「東北大学さんのリベンジの場は僕らが用意します」と主管の意向を伝えました。

### 【大会の準備】

PQJ 2023 の運営は運営チームと問題作成チームに分かれており、メンバーは一部重複しています。

事務局とのミーティングを経て PQJ 2023 の主催が正式に決まってからは、運営チームで各所への連絡、企画書の作成、渉外、ポスターの作成、ホームページの運用、SNS の運用などを分担して進めていきました。PQJ 2022 の運営用フォルダを共有していただいたので、前年度の大会を参考にして進めることができました。Twitter と Facebook のアカウントも引き継ぎましたが、Instagram のアカウントは新たにつくりました。のちに Instagram の投票機能を使って PQJ の過去問を出題したことが、大会の宣伝に大きな威力を発揮したようです。2 週に一度のオンラインミーティングで進捗を確認しつつ、クイズの形式につ

いて話し合いました。

同時に、問題作成チームで問題の作成も進めていきました。各自で作成した問題を 2 週に一度のオンラインミーティングで検討しました。

メンバーも少しずつ増え、全校から運営を募集すると 4 人が反応してくれました。のちに当日スタッフの 3 人を加え、16 人もの学生が大会の運営に関わることになるのです。

PQJ 2022 との大きな違いは、敗者復活戦を用意し、回答の文字数がそのまま得点になるという特殊なルールを導入したことです。新ステージの導入により、前年度の反省点であった予選下位チームの大会からの疎外感を緩和したつもりです。

運営にあたり苦労したのは、中国への対応でした。Facebook、Twitter、Instagram、Google Forms、YouTube に加え、PQJ 2022 で使用された Kahoot! というクイズ用アプリにいたるまで、中国で使えないツールが多すぎました。そのため、Kahoot! ではなく AhaSlides という別のツールを使う、大会に Google Forms を使用しない、参加登録も別のルートで受け付ける、YouTube のライブストリーミング配信ではなく、Zoom のメインルームでの観戦を Observer に許可するなどの工夫が必要でした。

もちろん、一国の参加者のためにそこまでするくらいなら、もっとほかのことに労力を費やすべきという考えもあるでしょうし、その考えが頭をよぎったことも何度もありました。それでも私たちは、PQJ への参加を希望するすべてのひとが、住んでいる国や地域によらず平等に参加できる環境を整えることを選びました。そしてそれゆえに、本大会が真の国際大会であると胸を張っていることができましょう。

大会当日も、お祈りの時間なので少し待ってほしいというお願いが参加者からあり、進行を止めてお祈りのための時間をつくりました。基礎医学のクイズで世界一を決めることよりも、むしろそのような国際交流の場を提供することこそ、これまでの PQJ が大事にしてきたもののなのです。

## 【そして当日へ】

年が明けてからは大会の準備で多忙を極めました。

問題作成チームではそれぞれのラウンドを分担して担当しました。First&Second チームはみんなで作った問題を吟味して取捨選択し、AhaSlides で回答できるようにしてくれました。Consolation チームは新ルールでユニークな問題をつくってくれ、また豊富なプログラムの知識と技術を駆使して、Google Forms を使用せずに Zoom の投票機能を利用して自動採点システムを構築してくれました。Final チームでは単なる知識だけでは解けない難問を用意し、決勝の舞台を整えました。

運営チームでは広報にも力を入れ、参加登録締め切り後は Slack 上で分担して参加者の対応にあたりました。パンフレット作成チームが素敵なパンフレットを用意してくれ、賞状担当がクールな賞状を準備してくれました。渉外チームは継続して協賛企業と副賞の交渉を進めてくれました。

大会直前は参加者や各所とのやりとり、スライドの作成、当日のシミュレーション、進行の準備などで息をつく暇もありませんでした。特に大会前の数日間、私は食事や睡眠もまともに取らなかったにもかかわらず、当日の午前中はほかのメンバーに進行を任せ、別室で決勝のスライドをつくっているという、なんともお粗末な有様でした。

どれだけ入念に準備を重ねても想定外のことは起こるもので、当日はここには書き尽くせないほどのトラブルに見舞われましたが、その度にスタッフが臨機応変に対応してくれました。そしてなんとかすべてのラウンドが終了し、PQJ 2023 は予定時間を大幅にオーバーしつつも、盛況のなかで幕を閉じました。同率 1 位の 2 チームのうち、一方はスロベニアの Metabolic Masters、そしてもう一方は東北大学の Kami no money money という、なんともドラマチックな展開でした。

## 【大会を終えて】

大会を終えて思うのは、なんとなかったなということです。

もちろんこの大会は 100 点満点ではありませんし、個人的な後悔や反省をあげればきりがありません。それでもなんとかなりました。予想もしなかった多くの困難が私たちを待ち受けていました。それでもなんとかなりました。英語を話せるスタッフがいたわけではありません。それでもなんとかなりました。

PQJ は手術とは違います。デスゲームでもない限り、クイズ大会で人は死にません。笑われる勇気さえあれば、おそらく多くのことは成し遂げられるということを、私は身をもって知ったのです。

成し遂げるといっても、私が何か特別なことをしたわけではありません。PQJ の主催はたまたま降ってきたチャンスですし、PQJ の代表は役割のひとつにすぎません。グループワークに司会者がいたほうがよいのと同じで、全体をマネジメントするひとはやはりいたほうがよいです。対外的にも代表者を決めておいたほうがやりやすいです。そのために「代表」の肩書が必要だっただけです。

ひとが集まるところにしかドラマは生まれません。私たちにできるのは、その場所を提供することだけです。感染症、戦争、ナショナリズム…分断の時代にあって、世界中の学生が集まって何かをする、たったそれだけのことに意味があるように思います。

このような大規模な国際大会を学生主導で開催できたことは、私たちにとても非常に貴重な経験ですし、おそらく一生の財産になるでしょう。

審判の先生方（南沢亨先生、小野富三人先生、椎橋美智男先生）をはじめ、後援の日本生理学会の皆様、大会をサポートしてくださった PQJ 事務局の皆様（井上鐘哲さん、岡田浩太郎さん、岩田陽太さん）と PQJ 2022 代表のト部真輝さん、協賛企業（医学書院、エムスリー、ナガイレーベン、丸善、羊土社）の皆様、広報にご協力いただいた有限会社ノトコードとエムスリーエデュケーションの皆様、特別顧問の Malaya 大学の Cheng Hwee Ming 先生、細胞生理学講座の先生方をはじめ、本大会を応援してくださった札幌医科大学職員の皆様に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

ます。加えて、はじめは不可能にすら思えた PQJ の主催とともに挑んでくれた仲間たち、そして一緒に大会を盛り上げてくれた参加者の皆様と、この大会に関わってくださったすべての方々に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

次の PQJ は 2024 年 3 月 24 日に開催予定です。主催校は島根大学が引き受けてくださいました。5 年ぶりのオンサイト開催とのことで胸が躍ります。今後とも PQJ を何卒よろしくお願いいたします。

「教育のページ」は学部学生，大学院生，ポスドク，教員などを対象に，生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています。原稿は Web（日本生理学会ホームページ）上にも掲載されます。皆様のご投稿をお待ちしています。投稿規程は [http://physiology.jp/magazine/contribution\\_rule/](http://physiology.jp/magazine/contribution_rule/) をご参照ください。